

## 紀要とインパクトファクター

リハビリテーション学部 森 永 敏 博

リハビリテーション学部紀要も回を重ね第12号を発刊するに至りました。学部創設以来毎年欠かさずことなく発刊を続けることが出来たのは編集委員会のご苦勞の賜物と感謝申し上げる次第です。今後は新たに創設された大学リポジトリに収録論文は登録されることとなりますが、紀要冊子として発刊を続ける努力も無意味ではないと思います。

これまでの編集、発刊を顧みて感じたことを述べてみたいと思います。

印象の一つとして、回を重ねるにつれて収録論文の投稿数を確保することに委員会の苦勞を見受けたことです。これは学部内の研究活動が停滞したと結論付けるのは早計で、必ずしも正当な評価とは言えません。

要因の一つとして考えられることは、多くの教員にとって紀要に対する評価があまり高くないと思われることです。一般論で言えば紀要の学術的評価は必ずしも高くないというのが現実かも知れません。今ではほとんどの研究領域で先端的研究論文はその領域における専門雑誌に査読者（レフリー）の審判を経て掲載される専門雑誌が存在するということです。必然的に専門誌でない紀要や年報などで発表された論文は評価が下がるということになってしまうからです。専門領域の研究者に読んでももらえない、極論すると誰にも読んでももらえないかもしれないものに投稿しても意味がないということになってしまうのかもしれない。

自然科学や社会科学の分野の研究者はよくインパクトファクター（**impact factor**、**IF**）という言葉に口をします。これは雑誌の3年分のデータをもとに収録論文の被引用回数から算出されるもので、引用される論文数が多ければスコアも上がりその雑誌の評価も高くなります。この方法は1955年 Garfield によって考案されたものですが、彼自身も言っているように「学術雑誌」の評価指標であって論文はもとより研究者の評価に用いるものではない、ということです。自身の投稿した論文掲載誌の **IF** を足し合わせて業績評価とするのも無意味であると。しかしこのような **IF** 値を大学教員の採用基準にする大学すらあるのが現実です。また **IF** は英文誌にのみ付与されるものであり、和文誌にはつかない（必ずしも正しくないのだが）、したがって英文論文にまとめないと意味がない、など **IF** に関する意見は様々

あるのが現状です。

振り返ってリハビリテーション医学、とりわけ理学療法や作業療法の分野における研究について考えてみます。IFの様な評価尺度を用いることが実学的性格の濃いリハビリテーションの発展に貢献するでしょうか。

日常生活における小さな工夫や発見を積み重ねることなしにはリハビリテーションという分野の発展は望めません。本紀要がこれらの実生活上の創意工夫や小さな問題解決などを提供するための“舞台”にでもなれば本紀要にとってこれ以上の誉はないと思います。